

未来をともに生きるパートナーとして

関連する主な人権課題：アイヌの人々

1 テーマの背景及び指導の観点

- (1) 世界の様々な先住民族の人々と、相互に人格と個性を尊重し合い、共生的かつ多様な社会を実現していくうえで、「民族の共生」という理念を共有することが重要である。そして、日本国内にも「アイヌ」という先住民族が生活していることを認識することが必要である。
- (2) アイヌの人々の文化や伝統は、保存・伝承が十分に図られているとは言えない状況がある。また、アイヌの人々の経済状況や生活環境、教育水準などは、他の人々となお格差がある。さらに、結婚や就職などにおいて、偏見や差別の問題が残存している。しかし、これまで、アイヌの人々の問題は、北海道の問題であるとされてきた側面もあり、道外においては、アイヌの文化活動などの取組や理解が十分に進んでいないのが実態である。
こうした中で、アイヌの人々の人権を尊重する観点から、アイヌの人々の歴史、文化、伝統及び現状に関する認識と理解を深めることが求められている。
- (3) 文化の復興とは、単に過去の原状を回復するという意味ではなく、伝統を踏まえて文化の復興を図るとともに、それを基礎として新しい文化を創造していくという、過去から未来へつなげる取組である。すなわち、アイヌ文化の現代的な回復や将来へ向けた創造・発展という視点、また、国民一人一人がアイヌ文化の価値を実感・共有できるような多様な文化と民族の共生という視点が重要である。
- (4) 学校教育においては、アイヌの人々の基本的人権の尊重の視点から教育を推進することが大切である。指導に際しては、日本列島各地の人々が、それぞれに文化的な多様性をもって歴史を形成してきたことに気づかせ、複眼的な歴史認識を育成することが大切である。また、示された資料などの内容を無批判に受け入れるのではなく、自ら資料を収集・選択する力や、それを批判的に読み取って考察する力、さらに、その成果を年表や地図など、自ら作成した資料で適切に表現する力を身に付けさせることも大切である。

2 展開例（研究課題(1)）

(1) 学習のねらい

アイヌの歴史や世界の先住民族について理解し、多様な文化と民族が共生する社会をめざそうとする意欲や態度を身につける。

(2) 展開例

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 班で研究テーマを話し合う。	○ 「アイヌ民族：歴史と現在」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)などを参考にして、テーマを決めさせる。
2 テーマについて、調べた内容を整理する。	○ 「現在のアイヌの人々の生活や文化」「世界の先住民族」と関連づけるなど、テーマを掘り下げて整理させる。
3 班ごとに発表する。	○ 「アイヌ文化の未来に向けて」「アイヌを身近に感じるには」など、提言やアイデアを盛り込んで発表させる。
4 ふり返しを行う。	○ 多様な文化と民族が共生する社会をめざそうとする意欲や態度を身につけさせる。

3 参考

(1) 法律などにおける「アイヌの人々」及び「アイヌ民族」という表記について

ア 「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会 報告書」[平成 21(2009)年]

個々のアイヌの人々のアイデンティティを保障するためには、その拠り所となる民族の存在が不可欠であるから、その限りにおいて、先住民族としてのアイヌという集団を対象とする政策の必要性・合理性も認められなければならない。

先住民族とは、一地域に、歴史的に国家の統治が及ぶ前から、国家を構成する多数民族と異なる文化とアイデンティティを持つ民族として居住し、その後、その意に関わらずこの多数民族の支配を受けながらも、なお独自の文化とアイデンティティを喪失することなく同地域に居住している民族である。

イ 「人権教育・啓発に関する基本計画」[平成 14(2002)年]

現在及び将来にわたって人権擁護を推進していく上で、特に、女性、子ども、高齢者、障害者、同和問題、アイヌの人々、外国人、H I V感染者やハンセン病患者等をめぐる様々な人権問題は重要課題となっており…(略)…。

ウ 「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」[平成 20(2008)年第 169 回国会]

アイヌの人々を日本列島北部周辺、とりわけ北海道に先住し、独自の言語、宗教や文化の独自性を有する先住民族として認めること。

エ 「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」[平成 9(1997)年]

アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り、あわせて我が国の多様な文化の発展に寄与することを目的とする。

(2) アイヌ語について

アイヌ語は、特定の文字で表記する方法が定まっていないため、「アイヌ語には文字がない」と言われることがある。しかし、大正時代の頃から、アイヌの人々自身により、ローマ字やひらがな、カタカナなどを用いて、アイヌ語を書き残す取組が続けられており、現在も様々な立場の人によって、アイヌ語の発音を書き表す工夫がされている。また、ラジオなどにおいては、「アイヌ語講座」が開催されている。

なお、平成 21(2009)年、ユネスコは、アイヌ語が「極めて深刻」な消滅の危機にある言語の一つであると指摘している。

結城さん出演の音楽ライブで行われた昨夏の予告上映。キツネが一筋の涙を流す場面に100人を超す観客がじっと見入った。作品へ高まる期待に完成への決意を新たに。家族は妻と2男3女。北海道出身。46歳。

(3) 神戸新聞 [平成 23(2011)年2月2日付から]

「ごみを捨てる時、その行き先のことまで考えてほしい。アイヌ民族の神話がそのきっかけになれば。廃棄物処分場を舞台としたオリジナルの神話「カムイユカラ」を創作し、木版画と融合させた短編アニメの制作を進めている。

キツネに宿るアイヌの神「カムイ」が廃棄物のせいで自然が汚染されたことを嘆き、土地を去るストーリー。神話に沿った木版画約30枚を制作、横浜市在住のアニメーター杉原由美子さんが映像化を担当し、今春の完成を目指す。

アイヌ神話で環境問題を訴える木版画家

「アートを通してアイヌの精神を伝えようと、約10年前から札幌市を拠点に音楽ライブや若手芸術家の支援など、幅広い活動をしてきたが、神話の創作には「恐れ多くて」手が出せなかった。その一方で「自然への畏怖や、それを侵すタフーを感覚とえようと、約10年前から札幌市を拠点に音楽ライブや若手芸術家の支援を感じるようになり、創作に着手した。」

1作目の今回、このテーマにしたのは北海道に実在する廃棄物処分場に足を運び、近隣で暮らす人の話を聞いたのがきっかけ。周囲に漂う臭い、環境悪化に不安を訴える声。胸に響いた。「誰もがゴミを捨てて生きていく。その生活が自然を犠牲にして成り立っていることを意識することが大切と伝えたい」

